

米国留学のための英作文

アメリカの大学教育は厳しい、とよく言われる。毎週大量の読書を要求され、一学期間に幾度もレポートを書かされる。しかし具体的に何が大変なのだろうか。留学を考える学生はそれに向けてどのような準備をすればよいのだろうか。教養教育開発機構クリティカル・ライティング・プログラムが主催した本講演では、ハワイ大学マノア校助教授の吉原真里氏と同校で英作文を教えるヘザー・ダイヤモンド氏が、学生向けに具体的なアドバイスを提供した。

吉原氏は教養学部を卒業後、アメリカのブラウン大学のアメリカ文明科で博士号を取得した。

Embracing the East (Oxford University Press, 2002)で知られる新進気鋭のアメリカ研究者であり、現在はハワイ大学の大学院アメリカ研究科のチェア・ウーマンでもある。またアメリカの人文・社会科学系の大学院進学を目指す日本の学生向けに書かれた『アメリカの大学院で成功する方法』（中公新書）の著者でもある。



一方、ダイヤモンド氏はヒューストン大学やハワイ大学で約 20 年間にわたり大学の英作文を教えてきたベテラン教師である。

吉原氏は学生に向けて、まずは正しく読むことの重要性を説いた。データや事実を汲み取る読み方に終始せず、本の主張を把握する訓練が大切である。当たり前のことのように聞こえるが、現実には大学院生になっても、読み終えたばかりの研究書の主張 (argument/thesis) を的確に表現できない学生が少なくない。



このように、本の主張をしっかりと読み取ることが、明快な論旨を持つ作文を書く能力につながる。吉原氏は英作文をする際には漫然と始めるのではなく、まずは自分の主張をはっきりと決め、それをどのように展開するかについて十分なアウトラインを作るべきだと指摘した。さらに書き上げた後には幾度も書き直しをすること。気おけない仲間とライティング・グループを作り、お互いに書いたものをコメントし合い、書き直しの

作業を続けなければならない。

書き直しを続ける重要さの一例として、吉原氏は著書 *Embracing the East* の草稿がどのように変わったかを具体的にを見せてくれた。「草稿」とはいえ、すでに何十回も書き直した文章に対して、オックスフォード大学出版局の編集者は何行、何十ページにもわたる削除を指示した。OHC に映し出される吉原氏の原稿には、編集者の手による細かい修正案と大

幅な削除案が記されていた。呆気にとられる学生たちに向かって、吉原氏はこのような書き直し作業は「当然」と説明した。

ダイヤモンド氏も吉原氏同様、書き直しの大切さ、その際に仲間（Peer）に見てもらうことの重要性を指摘した。ダイヤモンド氏は授業中にも学生同士が作文を読みあうようにさせるといふ。本人が書くときにも、「ライティング・グループ」を友人と形成し、相互に読み合うようにする。互いの論文を批評することで、自分の論文の書き方がより明確になるからだ。

一方、ダイヤモンド氏はアウトラインなどを事前に作らずに書き始めることの大切さも指摘した。何も書けなくなってしまったときに、とにかく何でもいいから書く。誰にも見せる必要のない、自らの意識の流れを淡々と書くことも大切である。

講演後には活発な質疑応答が行われた。出席者は教養学部の一年生から大学院総合文化研究科の博士課程の学生までさまざまだったが、多くがアメリカ留学を予定・希望しており、具体的な質問が飛び交った。一学期に書かされるレポートのページ数、アメリカでは何が剽窃と定義されるのか、ライティングセンターの有効な活用法、良いライティング仲間を見つける方法などの問いに対して、吉原氏とダイヤモンド氏は自らの体験を交えて丁寧に答えてくれた。質疑終了後には下北沢の居酒屋に場所を移し、約10名の学部生・院生との交流が夜遅くまで続けられた。学生たちにとっては米国留学の厳しさを実感するとともに、やる気を刺激され、おおいに励みになる夜となった。

